



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 13 主日 B 年 (2024 年 6 月 30 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 1 章 13 — 15 節、2 章 23 — 24 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙二 8 章 7、9、13 — 15 節

福音朗読：マルコによる福音書 5 章 21 — 43 節

似姿

三つの朗読から

第一朗読の最初の言葉「神が死を造られたわけではなく……」(1 章 13 節) は、読む者を死についての黙想へとといざないます。生へのあきらめとして死をとらえがちな現代人に対して、神さまは被造物の死を望んでおられないことが明らかにされます。なぜなら、「神は人間を不滅な者として創造し、御自分の本性の似姿として造られた」(2 章 23 節) からです。

第二朗読では「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた」(8 章 9 節) は心に刻みたい言葉です。パウロはそれを「わたしたちの主イエス・キリストの恵み」と表現します(同)。フランシスコ会訳は「わたしたちの主イエス・キリストの慈しみ」としているのが印象的です。人となった神のひとり子であるイエスさま、十字架に架けられたイエスさま、イエスさまの生き方は、わたしたちを豊かにするための貧しさだったのです。

福音朗読は長いですが、12 年間も出血を患っている女性の心情を味わえたらよいでしょう。ただ、イエスさまに触れさえすれば何かが変わるかもしれないという思いです。また、瀕死の子どもをなんとかかしてもらいたいと願う会堂長のヤイロの気持ちも味わえたらよいでしょう。どの人も切羽詰まったところで、イエスさまに「しきりに願った」(23 節) のでした。

説教：似姿

第一朗読は『知恵の書』から撮られています。『知恵の書』は、イエスさまが誕生なさるおよそ100年前に、エジプトのアレクサンドリアという町で書かれたと言われています。そこにはパレスチナ地方を離れて暮らすユダヤ人であるディアスポラ（離散ユダヤ人）が数多く住んでいました。この町は、ユダヤ教の文化であるヘブライズムと、ギリシアの文化であるヘレニズムが交叉する場所でした。異教の文化に魅せられて信仰を失いそうになるユダヤ人のために、信仰をふるいたたせるために書かれたのが『知恵の書』です。と同時に、この書は、ヘレニズムの文化にある人々にユダヤ教の正統性を擁護するためにも記されました。

第一朗読の終わりの方にある「似姿」（23節）に注目してみてください。『知恵の書』はギリシア語で書かれていますので、原文はエイコーンです。これはヘブライ語で像、似姿を意味するツェレムの訳語です。旧約聖書のギリシア語訳である七十人訳聖書では、エイコーンはおよそ60回使われているそうです。その多くは『ダニエル書』で用いられています。次にエイコーンの用例が多いのが『知恵の書』だそうです。「肖像」などと訳されています（14章15、17節、15章7節参照）。また、神の善のエイコーン（姿）は知恵であると記されています。「知恵は永遠の光の反映、神の働きを映す曇りのない鏡、神の善の姿である」（7章26節）。2章23節は、知恵に開かれている人は自分自身が神の「似姿」（エイコーン）であることに気がつくのだと伝えます。そんな人は木片を使って「人の姿」（3章13節）に造り上げても、「その像が自分では何もできないことを」（16節）知っています。

エイコーンは、神の似姿に創られた人間の尊厳を表す言葉になります。と、同時に「人間の姿で現れ」（フィリ2章7節）た主イエス・キリストのへりくだりを表す言葉にも新約聖書ではありません。

似姿を回復させるために、イエスさまは、今日の福音朗読では病気に苦しむ人々に関わるのです。

お知らせ

運営協議会

日時：7月14日 ミサ後

場所：アントニオ会館

皆さま、できるだけ参加してください。